

目的意識×問題発見・解決型能力を育成する これからの推薦・AO入試指導

“答えがひとつでない時代”が大学入試にも迫っている。世の中の変化が激しく、予測不可能な時代だ。今まで通用した答えが通用しない。時代の潮流は現在の高大接続や新しい大学入試にも影響するだけでなく、すでに入試問題に影響している。推薦・AO入試において小論文の問題の変化が顕著だ。今回は最近の小論文で出題される答えがひとつでない問いに焦点を当てて考えてみる。

藤岡慎二

株式会社
Prima pinguino
代表取締役

第5回

答えがひとつでない問いに 対応する小論文指導



ふじおか・しんじ ●1975年生まれ
慶應義塾大学大学院修了。数学や生物の大学受験対策を教える塾講師を経て、大学院でキャリア教育の重要性に気付き、研究を開始。小学生から社会人までを対象とした現場指導経験を有し、推薦・AO入試対策、社会人基礎力の指導や教材・プログラム開発を大手大学受験予備校や高校・大学で行う。島根県立隠岐島前高校をはじめとし、行政と協業し教育を通じた地方創生に取り組む。現在、北海道から沖縄までの高校魅力化プロジェクトに参画、高校連携型の公営塾を運営。

推薦・AO入試で出題される小論文のタイプには「課題文やグラフ・表を題材とするタイプ」「講義を聞いて課題に答えるタイプ」などがあるが、最近増えているのが「答えがひとつでないタイプ」だ。

「課題文やグラフ・表を題材とするタイプ」は最も一般的で推薦・AO入試に限らず、一般入試でも出題される。課題文の要約やグラフ・表を読み取りわかることを記述させ、読み取った内容を元に受験生の考えやアイデア、解決策などを答えさせる。このタイプに関しての対策はすでに多くの書籍があるので、ここでは割愛し、今回は「答えがひとつでないタイプ」について考えたい。

「最も信頼を集めている人を見つめる問題」にどう答えるか

たとえばこんな問いがある。

「人口1000名足らずのA島の

住人の中で、誰が最も住民の信頼を集めている人物であるかを、調査してきてほしい」との調査をあなたは依頼されたらと想像してみてください。その時にあなたは何をどのような方法で調べますか、ちなみにあなたに与えられた調査期間は1週間、あなたはその島で話されている言語を理解できないことを前提とします。答えを400字程度でまとめてください

「これは慶應義塾大学法学部のAO入試、F・T入試の小論文の例として有名な問いだ。この問いの答えはもちろん、ひとつではない。100人いたら、100と通りの答えがある。むしろ、ありがちな回答としては、試験担当者を唸らせることは難しいだろう。

慶應義塾大学では毎年こういった問いが出題されている。上記の問いに答える際のひとつのコツはまず「信

頼」を定義すること、言い換えれば問題の本質を自分なりに把握・表現することだ。定義すれば、解決の方向を絞ることができ、読み手に理解させやすくなる。そのうえで、「1週間以内」「相手の言語を理解できない」という条件を守って答えを考えれば良い。さまざまな解釈ができてしまう概念を定義し、解決の方向性を絞ったうえで、条件を守り、相手にわかりやすく説明できれば、どのような答えでも構わないのだ。

必要なのは思考停止に陥らないこと

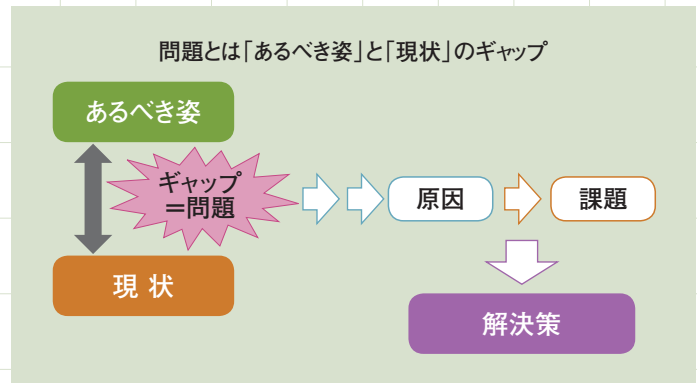
このようなタイプの問いに答えるために必要なのは思考停止をしないことだ。ありきたりのパターンに安易に当てはめては思考停止に陥る可能性がある。自らの思考を常に批判的、客観的にとらえるクリティカル・シンキングがベースとして必要になる。

表2 問題を明確にするための7つの視点

① What?	問題は何か
② Who?	誰にとっての問題か
③ When?	いつ問題なのか
④ Where?	どこで問題になっているのか
⑤ What is purpose?	なぜ問題か
⑥ What is cause?	問題の原因は何か
⑦ How?	今までどのような方法で解決を図ってきたのか

問題は、問題についての多様な視点と、その視点についての適切な情報量により明確になる。

図1 問題を把握し原因・課題に対する解決策を考える思考の型



問題とはあるべき姿と現状のギャップだ。例えば「貧困」は状態であり、問題ではない。貧困という状態によって引き起こされる現状と、貧困という状態が解消されたあるべき姿(ビジョン)の間こそ、解決すべき問題が存在する。問題を把握してから、問題が起きている原因を深掘りしながら追求し、課題を明確にしたうえで、解決策を考える思考の型は、答えがひとつではない問いを考えるうえで強い武器となる。

まず、問いを読み、目の前にある問題は、今まで自分が直面した問題なのか、もし直面したことがない問題であれば、どこが異なるのか、と自らに問いなおすのもクリティカル・シンキングだ。

さらに出題の背景を察し、なぜ問うのがわかれば、何を問いたいのかが立体的に見えてくる。情報を分析し、問題を正確に把握する力がここで必要になる。

そして、問題を理解したうえで、自らがもっているさまざまな知識を組み合わせ、答えを紡ぐ構想力が求められる。最後に紡いだ答えを相手にわかりやすく組み立て、筋道を立てて表現する力も重要だ。これらが答えがひとつでない小論文の問いに求められる力だ。

**文章の型ではなく
思考の型を習得する**

もちろん、日々の授業での知識習得は大前提だ。知識がないところに問題を把握する力も、解決策も生じない。そのうえで、答えがひとつでない問いに対峙する力を身につけるための第一歩は、思考の型⇨問題発見・解決能力のフレームの習得だと筆者は考える。

まず生徒に理解してもらいたいのは、問題とは何かということだ。問題とは「あるべき姿と現状のギャップ」(図1)である。慶應義塾大学の問題の例で言えば、あるべき姿は「最も信頼できる人が特定されている」状態であり、現状との間に解決しなければならぬ問題がある。

しかし答えがひとつでない問いは、そもそも問題の把握が難しい。目の前にある情報を分析し、問題を明確にするためには、図2に示したような多様な視点から考える癖をつけることだ。

このように「問題を明確にしたうえで、問題から課題を導き、解決策を考え表現する」という思考の型を身につけておけば、どのような問いに出会っても答えを導けるだろう。

**文章表現と日常生活で
思考の型を鍛える**

最後に、思考の型を身につけるためのふたつの方法を提案したい。ひとつは文章表現を通して鍛える方法。もうひとつはそうして身につけた思考の型を日常の学校生活のなかで活用することだ。

文章表現を通したトレーニングでは、答えがひとつでない小論文の課題

に取り組ませる。文章には生徒の思考がそのまま現れるので、文章を読みながら思考の型どおり考えられているか、視点に過不足はないかを共に確認していこう。教師からの指摘を踏まえて、生徒に再度記述させ、合格点になるまで何度も確認することで型を身につけていくのだ。

図に示したような思考の型や視点、合格点のポイント(ルーブリック評価)を生徒と共有しておくことで有効なヒントになるだろう。問題の把握においては知識構成型ジグソー法などを取り入れると多様な視点や知識の獲得に役立つ。また、生徒同士で小論文を読み合い、思考の型を使っているかを確かめるのも良いだろう。

そのうえで、ぜひ勧めたいのが日常生活における活動である。高校生活は委員会活動、部活などに多くの解決すべき問題がある。問題が明確でなかったり、情報が欠けていたりするような状況で、多くの同級生や先生と議論しながら問題を把握し、解決策を考える活動をしてもらいたい。日常生活に隠れている答えがひとつでない生の問題に対して、日々考え続けることこそ、思考停止をしない習性を身につける第一歩だ。